かくて遂に一九〇二年初頭、同盟の成立となつた所以を內外の史料を縱橫に驅使して、精に入り微を穿つて論述されてゐる。

支那事變勃發して旣に二ヶ年、本年六月十四日、遂に天津英租界は我が軍に遮斷さるゝに至つた。英の支那に於ける權益は日英同盟の破棄以來、擁護者を失つて不安の情況を繼續しつゞけたが、今や徹底的打擊を蒙るやも計り難き今日、博士の明快・精緻なるこの論文に接し、僅か三十七年前締結された日英同盟を追憶する時歷史の變動の急激なるに感慨なきを得ない。

三、「エリユトラ海案內記」に見えたる紀元一世紀の南海貿易（村川堅太郎）、東西交涉史上に於ける十宇軍の意義（山中謙二）、文化史上に於ける佛蘭西東洋政策の環境（長壽吉）、露國の東亞政策と列强（齋藤淸太郎）、米國の東洋政策（新見吉治）等は專門の大家が夫々の分野に於ける研鑽を公表された好論文であるが、その內容紹介は紙面の都合上割愛する。（吉原好人）

（菊判上下二册、一四三八頁、昭和十四年五月、東京富山房發行。定價七圓五十錢）

滿洲金石志稿　第二册

園田一龜編

『滿洲金石志稿　第一册』が發行せられたのは、去る昭和十一年四月のことであつた。それは第一期　高句麗渤海時代、第二期　遼時代、第三期　金時代、第四期　元時代の四期に分たれ、周到に筆錄せられた金石文そのものはいふまでもなく、各金石文ごとに、その存在の狀態、變遷等述べてある「略解」、參考書目をあつめた「文獻」の項によつて、われ〳〵の蒙つた恩惠は實に大きいものであつた。今また、その第二册を手にすることのできたのは、學界のために慶賀に堪へない。

本書は、第一册の第四期　元時代にひきつゞいて、「第五期　明時代」百四十九種を採錄し、その一つ〳〵に、「略解」「文獻」の項を附してゐることは、第一册と同樣である。

明の政令の及んだのは、開原を極邊とする邊墻以南に限られてゐた。その關係上、本書に載せられたものは、明初滿洲東北方面の經略を記念する吉林・阿什哈達の摩崖碑と、黑龍江畔チルの奴兒干永寧寺碑とを例外として、すべて右の地域內のものであり、北鎭・遼陽・鐵嶺に存するものが最も多い。その種類は、寺廟關係のものがその多くを占め、墓誌銘がこれに次いでをり、史的價値の高いものが少くない。

滿洲に於ける金石文を蒐錄したものとしては、この志稿第一册刊行後に公にせられた羅振玉氏の『滿洲金石志』が各時代にわたつて蒐錄したものとして重寶がられてゐる。しかし、園田氏の志稿の强味は、たゞ在來の拓本類を手錄するといふ從來行はれてゐた方法にあきたらないで、事情の許すかぎり、その現地に赴いて、碑石を精密に調査し、拓ちながら讀むといふ方法をとつてゐることである。しかも、志稿第二册は、その分布範圍が滿洲の南半分に限られてをり、比較的に現地調査を行ひやすいといふ狀態にあるために、第一册に比して、編者自らの調査を經たものがはるか

に多い。これこそ、本書が他書の追隨をゆるさない所である。

また、今一つの特徴は、事情やむを得ずして拓本によるとしても、最もよいものを選ぶことに努力してゐるといふことである。難讀と稱せられる奴兒干永寧寺碑、重建永寧寺碑の二者については、梅原博士の手拓にかゝり、內藤乾吉氏の所藏せられる精拓により、從來よりも解讀の歩を進め得たことの如き、その好例であらう。

本書の刊行を紹介し、あはせて、交通不便の地に、時には身邊の危險をさへ感じながら、この事業を達成せられた編者の勞苦に對して敬意をさゝげたい。更に、吾人は、滿洲だけではなく、北支に於ても南支に於ても、この種の事業に着手できる日が早く來てほしいと希望するものである。（四六倍判、二六一頁、圖版十四、昭和十四年三月、南滿洲鐵道株式會社發行、非賣品）

〔外山軍治〕

列强現勢史・東中歐諸國

大類　伸著

思ふに、妥協は必ずしも最後の解決ではない。かのヴェルサイユ條約は、歷史と自然とを無視した人爲的體制であり、一種の妥協とも云ふべきものである。そして其の後に來るべき歷史の過程は、この妥協に對して求められた解決であつた。

「ロイド・ジョージは、世界大戰後のヴェルサイユ條約が强ひて作つた東中歐諸國の新地域的體制を指して、中央ヨーロッパをバルカン化したと云つたが、實に東中歐の新形勢は、その人種的分布から見ても又經濟的條件から見ても、極めて複雜なもので、幾多紛爭の種子を將來に含んで居るものであつた。」（百二十七頁）、この幾多の紛爭を歷史的に解明せんとするのが、本書の使命なのである。

我々が現代の歐洲諸情勢に眼を轉ずる時、そこに浮ぶ疑問の課題として、何故世界大戰後のオーストリアは獨立形態を維持し得なかつたのであらうかと叫ぶであらう。この問題に對して著者は根本原因としての物質的條件と民族問題とに就て說明して居られる。即ち、「大戰後のオーストリア國民の工業方面の所得は國民全收入の三分の二を占め、之を人口構成上から見ると、工業・鑛業・商業・交通運輸業等の從業者合計は、總人口に對する四十二・三％である。」（百六十八頁）所が、「農林業人口は僅かに三十四・七％と云ふ不均等な數字を示し、更に農耕地缺乏の程度は一層甚しく、總面積に對する農耕地の割合は僅かに二十三％に過ぎなかつた。」（百六十九頁）、かくて、「穀物の不足、中小商工業民衆乃至小市民層の充溢――これが世界大戰後の新オーストリア國家を彩る一つの原色となつたのである。」（百七十頁）、このやうに、「新しいオーストリアは工業國となつたが、而も其の資本主義的な發達は外國資本に依つて、移植されたもので、新オーストリアは獨立の物質的要件を缺いて居るものであつた。」（百七十一頁）、更に著者は其の民族問題に言及せられて居る。即ち、「オーストリアの國粹國家主義の體系程深刻に矛盾したものはなく、例へば、ドルフスや